

巻頭言



教職課程と課外活動の両立

教職課程センター長 曲田浩和

教職課程の学生が私のところに大学の課外活動と教職課程の両立について相談にきます。課外活動と教職課程の両立が難しいからどちらかにしたい、というのです。

本学には、インカレやコンクール入賞を目指すスポーツ系・文化系の部やサークルがあります。こうした団体に所属学生は上級学年になると、自分のことだけではなく、部全体のことを考えなくてはなりません。また、試合やコンクールが近づくと練習やミーティングの回数も増えます。結果がすべてでないよ、と周りから言われても、どうしても結果を求めてしまいます。ポジション争い、メンバー選考は先輩・後輩の序列は関係ありません。自然とプレッシャーで押し潰されそうになります。教育実習、介護等体験など乗り切れるのだろうか。不安が頭をよぎります。

教師は話しを聞くことや励ますことくらいしかできません。このような学生からの相談があることを、高校で野球部の監督をつとめている卒業生に話してみました。当時はたしかに部の練習が厳しく、教職課程との両立は想像以上に大変で、その監督は学生時代に選手を辞めて学生コーチになったそうです。そのことをいまでも後悔していると言っていました。その意味は、選手はその時でないとできない、いずれ指導者になり、自分は選手をまっとうしていないことに気づいたそうです。体が動きプレーができるうちは選手であり続けるべきです。卒業単位の取得・教職課程・課外活動をすべてやり遂げることはとても大変なことです。悩んでいる学生にはこのことを強く伝えてください、とその卒業生に懇願されました。

人それぞれ境遇も周囲の環境も異なります。正解は一つではありません。しかし、この卒業生の言葉には経験者としての重みがあります。いま迷っている、悩んでいる学生がいれば参考になると思います。そのうえで課外活動を辞めてしまった学生は、これまで課外活動をしていた時間をどのように使うかが大切です。小学生から大学生まで10年以上一つの競技などに打ち込んできた学生もいます。ぽっかり空いた穴を埋めるのは容易なことではありません。今やろうとしていることに強い意志を持って臨んでください。



スタートアップ講座に参加して

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 早川大貴



1. 参加しようと思った理由と目的

3年生になり、そろそろ自分の進路について考えていかないといけないと感じていました。しかし、教員採用試験で受験する教科やその対策に必要なテキストが無数にあるため混乱していました。だからスタートアップ講座を通して教員採用試験の情報を知り、その対策を早めにやりたいと感じたのです。また、その講座を通して、各都道府県の教員採用試験の問題傾向や特色を知る事でそれを受験する県の選択に生かしていきたいと思いました。

2. 参加してみて良かった点、勉強になったこと

参加して良かった事は教職課程センターの方が教員採用試験の各都道府県の試験内容や合格率を説明してくださる事で自分が分からなかった試験内容の部分が明確になったので良かったです。また、詳細な部分まで説明してくださったので、自分でその情報を集める時に見るべき重要点が明確になり、探しやすくなりました。

勉強になった点は教員採用試験の勉強を仲間と一緒にいった方が良いという事です。その講座が行われた時は仲間と一緒に取り組む事の大切さがあまり分かりませんでした。現在、教員採用試験の試験問題に取り組む中でつまづく時があります。その時に仲間と一緒に取り組む事で新たな発見や励ましをもらう事が出来ます。それゆえに教員採用試験の勉強を仲間と一緒にやる事の大切さが理解出来ました。

3. 教採に向けて、どう生かす

教員採用試験の勉強を1人で勉強するよりも複数人で行った方が受験する県の情報を共有でき、勉強へのやる気の維持なども可能なので良いと思いました。しかし、いきなり複数で行うのは難しいので仲の良い友達と始めていきたいです。

4. 教採への意気込み

スタートアップ講座に参加する事で自分が理解していなかった、教員採用試験の各都道府県の試験内容や合格率などの情報を得る事が出来ました。そこで得た情報や新たに調べた内容を基にして、自分の考察する教育理念に沿っている県を受験したいと思います。そして、スタートアップ講座で話してくださった先生も言っていましたが、受験は団体戦なので仲間と切磋琢磨し、時にお互いを励ましながらかん張りしていきます。





教員採用試験 2次直前対策講座に参加して

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 杉田理緒

◎参加理由

2次直前対策講座に申し込んだ理由は、この講座に「自治体ごとの試験方法の最終確認を行う」・「対面指導により、試験直前の不安解消を図る」というねらいがあると知ったからです。私は、講座の1週間後と2週間後に2次試験があったため、ここで先生方と友達と共に最終確認をしようと思いました。また、講座以降は大学がしばらく閉鎖期間に入ってしまうと知ったので、最後に対面で指導していただいて本番に備えようと考えました。

◎参加してみて勉強になったこと

2次直前対策講座は、①キャリアアドバイザーさんによる面接のポイント最終確認、②個人面接練習③それぞれが希望したものの練習（個人面接、集団面接、場面指導、模擬授業の4つから事前に1つ選択）、④全体でまとめ、という内容でした。私は、③は模擬授業を選択して参加しました。

個人面接練習は、先生1人・学生4人くらいで行いました。複数の人からの視線を感じながら話す感覚を最終確認したり、「今これが話題だからこんなことも聞かれそうだね」という雰囲気共有できたりして、安心につながりました。オンラインでは、どうしても他者から浴びる視線の感覚や、すべての面接官を見渡して話す感覚が対面とは違うと思うので、今回対面の講座に参加できて良かったと思いました。

模擬授業練習は、指導案と教材（自治体によっては指導案ではなく指導メモのところや、教材はエアで行うところもあると思います）を持ち込んで、先生1人・学生3人くらいで行いました。本番を想定して、名前を呼ばれて前に行き、模擬授業を終えて席に戻るまでの流れを3人通しで練習しました。その後、先生に指導をいただいたり、学生同士で意見交換をしたりしました。自分の課題が分かり、どう改善していくかみんなと一緒に考えることができ、とても勉強になりました。すべてのことがそうですが、1人では良いものにたどりつけないと思うので、こういった機会が大切だと感じました。



◎2次試験に向けてどのような効果があったか

練習の時間以外にも色々な先生たちや友達に会えて、応援の言葉をかけてもらったり、緊張を共有できたりしたことで、焦りをおさえることができました。講座に参加して不安がゼロになるということはないとは思いますが、自信をもつ1つの材料になると実感しました。試験で最大限の力を発揮できるように、直前でも焦りすぎず、いつも通りの自分で対策を進めていけば大丈夫だと思います。





教員採用試験 2次直前対策講座で合格に近づく

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 石川恭平

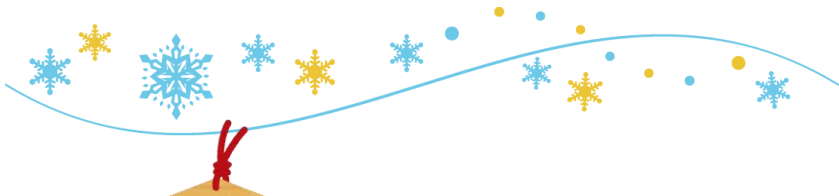
私は、4月頃から週1回の面接練習を友人と行ってきました。ほとんど同じメンバーで練習していたので、7月頃には、自分がどう答えるか、友人がどう答えるかも大体分かるようになっていました。面接に慣れてきたという面では良いことだったと思います。しかし、どうしても1つの答え方に固執してしまうことや、メンバーが同じなのでアドバイスすることがなくなるということがありました。そこで、これまでの振り返りと新しい視点を取り入れることを目的とし、二次対策講座に参加しました。

実際に参加してみると、期待していたもの以上の収穫がありました。1つ目は、新しい視点です。同じメンバーのときには言われてこなかったことを指摘され気付くことが多くありました。そして、他の人が面接している様子を見たり聞いたりすることで、そこから学ぶものが多くありました。自分では思いつかない考えや言葉で表現しているのを聞くと、とても参考になりました。2つ目は、本番のような緊張感を体感できるということです。個人的には、本番より対策講座のほうが緊張した気がします。普段の練習では慣れもあり緊張することは無くなっていました。しかし、対策講座では、普段は関わらない職員の方などが指導してくださるので、良い緊張感を味わうことができました。それに加え、初対面の人に自分の面接の態度や内容がどのように伝わっているかも確認することができました。

二次対策講座後は、指摘して頂いたことを仲間と共有し、納得がいくまで改善を行いました。試験当日は、入室までは緊張しましたが、面接が始まってしまうと緊張は無くなりました。それは、質問の内容が対策講座や日頃の練習で行ってきたものばかりであったからだと思います。準備してきた分だけ、当日は落ち着いて話すことができました。

試験当日は誰でも緊張します。そうしたなかで初対面の試験官に10~30分で評価されてしまいます。その短い時間のなかで自分の良さを伝えなければいけません。そのために大事なのは、やはり準備だだと思います。準備した分だけ、当日は落ち着いて対応できると思います。また、教採はチーム戦です。共に頑張れる仲間を探してみてください。面接のなかでも自分の性格を聞かれます。そういったことは、周りの仲間のほうが分かっているかもしれません。勉強の息抜きで、仲間と話し合う時間も大切にしてください。そういったことも面接に生きてくるが多かったです。何よりも、楽しみながら一生懸命に頑張ることが結果に繋がると思います。頑張ってください！





合格体験記（横浜市・小学校）

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 川合美乃莉

・合格に向けて頑張ったこと、こだわったこと

私は12月から本格的に勉強を始めました。3月までは筆記を行い、4月から面接練習を開始しました。筆記に関しては何冊か購入しそれを何回も繰り返し解きました。勉強場所については、私は浜松の実家に住んでいるため家または図書館に行って勉強しました。同じ空間そして友人の姿が見えないので皆がどれだけ勉強しているのかわからず常に不安でした。それでも乗り越えることができたのは1人の友人のおかげです。3月頃から友人とzoomをつなげての勉強を本格的に開始しました。繋げることで人に見られている危機感やわからないところをすぐに聞くことができとても良かったと思います。1人で最後までやり抜くにはモチベーションを保つのが大変なので友人と協力して高め合っていくのがとても良いと思います。面接練習に関してキャリア開発課と4人の先生にお願いしました。固定の3人の先生には毎週見ていただき対面で行いました。多くの先生に見てもらうことで1人ずつ質問の仕方、視点が違うこともあるためどんな質問も答えることができるようになります。

・後輩たちに伝えたいこと（併願、気持ちの切り替え方など）

まず初めに私は第一志望を1次試験で不合格になりました。試験当日悪天候により会場に向かっている途中で中止の連絡を受けました。数時間後、筆記試験を今年度は取りやめにして15分の面接1回で1次試験を行うという連絡でした。異例のことでありどうすればいいのかわかりませんでした。しかし試験が明日に迫っているためできるだけことはしました。面接ではある程度のことは答えることができたのですが結果は不合格でした。このように試験内容が急に変わる場合があります。それは予測することができないので、自治体を問わず教師になりたいのであれば併願をすべきだと思います。やらなければならないことが2倍になるため大変ではありますが、私は併願をして良かったと思っています。

私は併願先で合格をいただきました。第1志望は筆記が記述で、第2志望は科目は多いですがマーク式だったため、横浜市を選びました。第1志望が不合格になったとき幸い第2志望も同じ日に結果発表があり、あまり落ち込みはしませんでした。したがってすぐに第2志望の面接対策に取り組むことができました。しかし面接の受け答えに対して本当にこれで良いのか？と考えてしまうようになりました。考えてもわからないため受け答えだけでなく表情やうなずき方なども気をつけるようにしたり、友人にも気になる点を言ってもらったりして何度も練習しました。本番であまり気負わずに受け答えできたのは練習をたくさんしたからだだと思います。準備あるのみなので自分が納得いくまでやり続けてください。それが必ず良い方向に進むと思います。これから辛いこともあると思いますが頑張ってください。





合格体験記（愛知県・特別支援学校（中高社会））

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 栗田汐里

① 受験対策・勉強法について

【一次試験（筆記試験のみ）】

本格的に受験勉強を始めたのは、大学4年生の4月でした。私は自宅で集中して勉強することができなかつたため、平日と土曜日の週6日学校に来て勉強しました。日曜日は勉強する日もあれば、アルバイトをしている日もあったし、息抜きのためゆっくり過ごす日もありました。一日の流れとしては、学校に来る→9時から勉強開始→10時50分から10分間休憩→11時から再開→12時30分から昼ご飯→13時25分から再開→帰りの電車の時間を決めてその時間に合うように終わる→帰宅→休憩（夜ご飯）→遅くとも19時から勉強再開→22時くらいで終わるといった感じです。



勉強方法としては、教職教養・一般教養・専門教科（社会）に関するテキスト（協同教育研究会が出しているものの過去問と参考書を使用）をひたすら解くことをしていました。私の場合は、週6日の中で教職教養・一般教養・専門教科（社会）の3つを勉強する必要があったので、2日ずつに分けて（月：教職教養 火：一般教養 水：専門教科（社会）木…）行いました。専門教科（社会）については全国の過去の問題がまとまったテキストも使用しました。

CDP講座を受講する等活用できるものは最大限に活用しました。小論文対策としては、私だけで行えるものではなかつたので書き方やポイント等はCDP講座から学びました。

【二次試験（個人面接・場面指導）】

面接練習としては、一緒に面接練習を行っていた友達が全員一次試験で個人面接があったため、5月から一緒に行いました。学生4人と先生1人という形で、本番は個人面接ですが、練習は集団面接のような形で行いました。その結果、他の学生の答え方や言葉の言い回し等に刺激をもらい自分自身の答え方等を見直したり改善したりする、いい機会となりました。一次試験が近づいてきて筆記試験に対しての焦りが出てきたとき「一緒に面接練習している友達は一次試験に面接があるからやらないといけない。だけど、自分は一次には面接がないのに面接練習をしている意味はあるのか」という不安に襲われました。そのとき私は両方中途半端になることは嫌だったので、面接練習を一次試験が終わるまでは休むことにしました。今振り返ってもこの判断に後悔はありません。自分のやり方や自分を信じることも大事です。

② 後輩へ伝えておきたいこと

教員採用試験を終えて後輩の皆さんに伝えたいことが、二つあります。一つ目は、自分自身にあった勉強方法ややり方を見つけてください。そして続けてください。誰かがやっているから正解だということはありません。自分なりのやり方で大丈夫です。二つ目は自分や周りの人を信じてください。一つ目と関係してくるものでもありますが、自分を信じて、自分のやり方を続けていくことが本当に重要だと教員採用試験を通して私は学びました。だからこそ皆さんにも自分を信じてほしいと思います。ただ自分を信じることはそう簡単にできるものでもないと思いますし、私もすぐには難しかったです。そのときは、一緒に頑張っている周りの友達や先生方、また皆さんにかけてくれた言葉等を信じてみてください。きっと頑張ろうと思えるはずですよ。

それぞれの歩幅で、お互い一步一步前に進んでいきましょう。皆さんのこれからを心から応援しています。頑張る場所は違いますが、一緒に頑張りましょう。



合格体験記（愛知県・中学校外国語（英語）科）



国際福祉開発学部 国際福祉開発学科 4年 杉山和斗

私が教員採用試験に向けての勉強を始めたのは3年の夏です。試験までちょうど1年となったあたりで焦りを感じ、勉強を始めました。本体験記では、私が教員採用試験への勉強を始めてから試験本番までの間で感じたことや、取り組んでおいて良かったことなどを〈試験対策〉として4つのポイントにまとめました。〈後輩のみなさんへのメッセージ〉とともに、これから教員採用試験を受けるみなさんの参考になれば幸いです。

〈試験対策〉

① 早めに過去問を解いてみること

受験する自治体の過去問をなるべく早く解くことをおすすめします。自分のレベルを知ることで勉強の見通しを持つことができるからです。最初に過去問を解いた時は全く解くことができなかったのを覚えています。勉強を始めた当初は手当たり次第に参考書の問題を解いていましたが、過去問を解き始めてからは計画的に勉強を進めることができました。5年分の過去問を解くと自治体の出題傾向をつかむことができると思います。

② 友達や先生を頼ること

友達や先生方を積極的に頼ってください。私は友達や先生方に面接練習をお願いしました。様々な人と話をすることにより、多様な意見を取り入れることができました。口述試験では自分の強みや経験をわかりやすく具体的に伝えることが大切です。私は大学時代の経験を整理し、簡潔に伝えることを意識して練習しました。自分の伝えたいことがしっかりと伝わっているか、友達や先生方に何度も聞いていただき、コメントをもらおうと、自信をもって試験に臨むことができると思います。

③モチベーションを保つこと

試験勉強開始から本番まで何度も心が折れそうになりましたし、友達が就活を始めだしたり、過去問を解いてもなかなか点数が上がらなかつたりと、焦りや不安を感じることも多々ありました。勉強するモチベーションを保つのが難しかったように思います。そのため適度に息抜きをすることをおすすめします。私自身も映画を見たり、バッテリーセンターに行ったりしてリフレッシュしました。長時間勉強するのも良いですが、適度にリフレッシュすることでメリハリのついた効率の良い勉強ができると思います。

④ 大学時代に経験したことの整理

口述試験では大学時代に力を入れた活動や取り組んできたことなど、大学時代の経験について多く質問されました。早めに自分の強みや大学時代のエピソードなどを整理しておく、本番に自信をもって臨めるとと思います。コロナ禍でボランティア活動やサークル活動が制限されていたとは思いますが、人とは違うオリジナリティのある内容は、面接官の興味を引くと思います。

〈後輩のみなさんへのメッセージ〉

私は試験1ヶ月前まで目標とする点数に届いていませんでした。正直なところ「合格するのは難しいかも」と感じていました。しかし、教育実習で生徒たちや先生方からもらった激励の言葉を思い出して、がむしゃらに勉強しました。結果的に、希望する自治体に合格することができました。みなさんも最後まで諦めず、合格を勝ち取ってください。応援しています。



コロナ禍での二度目の教員採用試験を終えて

教職課程センター副センター長 齋藤一晴

コロナ禍での教員採用試験も二度目となった。合格者数だけを見れば、その数は減少を続けており厳しい状況といえる。しかし、学生たちはコロナによって同じ志を持つ仲間たちとの教採対策を制限されたなかで、懸命に合格を目指して奮闘したことは記録に留めておきたい。

さらに、大雨の影響で静岡県と浜松市の採用試験は、試験前日に試験科目が急遽変更され、何年もかけて準備してきた学生からすれば、対応に苦慮する状況があったことも述べておきたい。浜松市の場合、当初、筆記と面接が行われる予定だったものが、面接だけになった。わずか20分ほどの面接時間で受験者の何をどのように評価できるのか、何とも言えない気持ちになるのは私だけではないだろう。

合格者には共通点がある。それは、早くから対策、準備を行ったこと。そして、教員になることだけでなく、どのような教員になるのかを日々の授業から模索してきた点である。機械的に瞬発力を鍛えるだけの教採対策もときには必要かもしれないが、学生の目標や夢を、自身の力で中長期的に実現させるためには、教材研究や研究書を読むなどに力を割くことが大切だろう。教職課程センターは、そういった学生のニーズに対応できる場である必要がある。

今年度、教員採用試験の対策講座は、対面と遠隔、そしてその両方のハイブリットと、多様な実施方法を模索してきた。美浜と東海のキャンパスを遠隔でつないだり、卒業生に合格体験報告会に遠隔で参加してもらったりと、対面だけではない教採対策のあり方を考えるうえで貴重な1年になったといえる。こうした経験も、今後活かしていきたい。

教員採用試験対策講座への参加者も、さらなる増加を見込めるように企画内容の充実を図っていききたい。なかでも喫緊の課題は、集団討論や模擬授業、場面指導などに関する対策講座の実施である。今年度、不合格になった学生のなかには、筆記試験や個人面接は対応できたものの、模擬授業や場面指導で大きく減点された者が少なからずいた。こうした状況をふまえると、これまで以上の対応、対策が欠かせないだろう。

今後の教員採用試験対策を考えるうえで大切なことは、本学を卒業していく学生たちがどのような教員をめざすのか、というビジョンを明確に示せるようになることだと考える。それは何だろうか。「ふくし」の視点というのは簡単だが、具体的には何を意味するだろうか。コロナによって教員になることの意味はどの程度変化しただろうか。そうしたことも学生たちとともに議論していきたい。

コロナ禍において、教職課程センターが閉室され、美浜キャンパスであれば模擬授業教室の1252教室も長期間閉室となった。教科書や参考文献、卒業生が残した合格体験記から電子黒板に至るまで、十分に活用できたとはいえない。来年度はコロナと共存しながら、そういった図書や備品の活用を実現したい。

最後になるが、教採対策講座は、教職課程センターだけでなく、学務部、キャリア開発課、教職課程事務室との協働によって運営されている。学生からすれば、大学の各部署、様々な学部の教員が教採対策にたずさわっていることを心強く感じるはずである。来年度以降も、連携と協働を軸に、多くの学生が夢に近づけるよう力を尽くしたいと思う。



大学を卒業後、講師として感じていること

スポーツ科学部 スポーツ科学科 2020年度卒業
特別支援学校教諭 北村雄

1. はじめに

私は、約半年特別支援学校の講師として働き、とてもやりがいを感じている。子どもたちとコミュニケーションを積極的にとることや一緒に活動することで信頼関係を築いてきた。コミュニケーションのとり方はそれぞれ違うが、道具や表情などを通してコミュニケーションをとる楽しさがある。さまざまな障がい種や個人差があるが、どのように教育してきたかを少し紹介したいと思う。

2. 今年講師として現場に出てどんなことを思って教育してきたか

私は、大学で学んだ児童生徒の主体的・対話的な学びを常に念頭に置き、答えを言わず、発問や対話を大切にしている。答えが分からないとすぐに分からないと考えることを諦めてしまう生徒や発語が少なくコミュニケーションをとることが難しい生徒がいるため、主体的に考えている機会が少ないと感じる。そこで、質問の仕方を変えたり、選択肢を増やしたり、体の反応しているところを通してコミュニケーションをとったりするなど一人一人に応じた工夫や手立てを常に考えている。主体的に考えるスモールステップの積み重ねを通して、子どもたちが自ら考え、正解した時の「できた」や「やったー！」という達成感は、自分のことのようにうれしく思う。

3. 大学での学びについて

授業の中で、指導案を作成し、実際に4人～6人のグループを作り模擬授業をする授業が教職課程を履修する中で多かった。授業を考え、指導するまでには、単元計画があり、1回1回細かくねらいや目標、授業内容を考えなければいけなかった。また、障がいのある生徒は実態に応じた段階の目標や一人一人の実態把握と手立てを考えるなど1つの授業作りの大変さを痛感した。実際にグループで指導するときには、チームティーチングを行い、アイコンタクトやコミュニケーションをとりながら、お互い連携することでスムーズに授業を進めることができた。

現在、特にこのチームティーチングの大切さを感じる。私がメインで授業をする時に全体の説明で理解できる生徒もいれば、個別で説明を細分化し、伝えなければいけない生徒もいる。他の先生との連携なしでは授業はできないことを実感している。自分がサブの時には、スムーズに授業を進められるようにアイコンタクトやコミュニケーションを大切にし、メインの先生のサポートをしている。大学で経験した授業作りやチームティーチングの大切さは今にたくさん生かされている。

4. 最後に

子どもたちの主体性を大切にし、対話を多くすることを意識しているが、大学の授業での学びや経験なしでは今の自分の考え方や進路はなかったと感じている。教員の大変さを感じる一方、全員が楽しいと思える授業を考える楽しさや子どもたちのできた、という達成感を共有することができ、とてもやりがいを感じている。

また、日々の学校生活の中で、教育課程や学習指導要領など教員採用試験の問題になっていることが多くある。そのため、現場や子どもたちをイメージしながら基本的なことから応用まで知識を身につけることで、より深い学びができると思う。

常に学ぶ姿勢を心掛け、これからさらに経験と知識をつけていきたい。





教員生活 3 年目の最近

社会福祉学部 社会福祉学科 2018年度卒業

静岡県立高等学校教諭 清水翔太

私は大学卒業と同時に教員として働き始め、今年で3年目を迎えました。年度を重ねるとともに任される仕事が増えてきました。現在は、2年生の正担任、教科・系列主任、相談室担当、食物部・陸上部の副顧問などを行っております。その中で感じた大変だったこと、うれしかったことをご紹介しますと思います。

大変だったこと(大変なこと)はやはり担任業務です。昨年度から学級担任をしておりますが、今年度は特に「2年生は中だるみの時期」ということを強く感じております。1年次には校則を守って生活できていた生徒の乱れ、学校から足が遠く生徒の増加、人間関係のもつれによる問題の発生など挙げていけばきりがありません。そういった生徒の心に寄り添いながら、教員として学校生活を正しく送れるように指導をしていかななくてはいけないというのはとても大変です。生徒の様子をしっかりと見て、寄り添うことが問題解決に向けて大事だということは皆さんご存じのことだと思います。しかし様々な業務に追われる中で、そういった心掛けによる指導が難しくなっています。余裕のあった昨年度は、生徒の小さな変化に気づいて声掛けをすることができていましたが、今年度はそれがあまりできていないように感じています。業務が増えるということはそれだけ信頼されていることだと思いますが、自分のキャパシティをきちんと見極めて常に生徒第一の行動がとれるようになりたいと思います。

うれしかったことは生徒の成長を感じられたことです。昨年度担任をしていた生徒で、授業中にスマートフォンを常に操作している生徒がいると他の生徒から訴えがありました。私は授業担当ではなかったため、直接見つけて指導をするということができませんでした。各科目の先生方と協力をして、スマートフォンを操作しているところを見つけました。その後は、約1か月間毎日スマートフォンの預かり指導を行いました。預かるときや返すときには必ず一言声をかけつつ、スマートフォンがない状態の学校生活に慣れさせていきました。指導の効果があったのか、預かり指導終了後は授業中に操作しているところを見かけたという声もなくなり、テストの結果や授業の成績も指導前より良くなりました。教員が関わることで良くなるケースばかりではありませんが、生徒の成長を感じられ、関わってよかったと思えたこの経験は、とても印象に残っています。

最後に、これから教職を目指そうと考えている方へお伝えしたいことがあります。それは「石の上にも三年」ということです。1年目はどの仕事もそうだと思いますが、右も左もわからない状態で過ごしていきます。その中で自分から必要なことをしっかりと学び、行動していくことで徐々に業務に慣れていき、視野が広がり余裕が出てくると思います。その余裕が仕事の楽しさややりがいを感じることに繋がっていきます。いろいろなことでも言えますが、あきらめずに続けることを頑張ってください。





ドラマティックな人生

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修 2019年度卒業
北海道小学校教諭 星野さやか

寒すぎる学校

皆さん、初めまして。私は昨年3月に学校教育専修を卒業した星野さやかと申します。在籍中に北海道の教員採用試験を受けまして、昨年4月から日本の最東端の街の小学校に勤めています。出身は愛知県ではなく、元々道東でしたので、寒さには慣れっこ！・・・と言いたかったところなのですが、4年も愛知県に住んでいたもので、初任1年目は、久しぶりの極寒の環境に慣れず、何度も風邪を引いてしまいました。愛知県では、“夏にクーラーをつけず、熱中症になってしまう問題”があると思うのですが、私の学校では、“廊下が寒すぎて、鼻水が凍ってしまう問題”があります。教室の中は、石油ストーブとサーキュレーターのおかげで、とても暖かいのでご安心を。子どもたちの様子はと言いますと、皆かなり元気！！気温が10度を下回る日でも、半袖短パンで元気に校庭を走り回っています。

仕事を始めて知った“大きな気づき”

初任1年目の3月。4年生の担任をあと数日で終わるといった日に知りました。それは、「生徒指導と授業づくりは切っても切り離せない関係」ということです。「生徒指導が土台にあって、その上に授業が成り立つ」という言葉をよく耳にします。しかし、実際に教員になってみて、その二つは同時並行で進めていかないといけない課題なのだと気づきました。

授業の流れの中で『対話と共有』の時間があると思うのですが、その時間の中で、自分の考えを、根拠を述べながら伝えることができたり、他の子どもが発言した内容とつなげることができたりする子どもは、学校生活の中で友達と衝突することがあっても、しっかりと向き合っ自分の思いを伝えたり、上手に謝罪したりすることができるのだと思いました。“上手に謝罪”の部分を少し具体的にお話します。

出会った当初、相手と目を合わせず「ごめんなさい」としか言えなかった子どもが、1年を通して、授業の中で他者と対話する力をつけてきたおかげか、「そんな思いをさせてしまっていたなんて・・・、許してくれないと思うくらい酷いことをしたと思っている。本当にごめんなさい。」と言えるように成長したのです。相手の気持ちを考え、寄り添ったその伝え方に感動してしまいました。

大学で学んだ「人は人と対話を重ねることで、初めて自分以外の世界を知り、当たり前だと思っていたことが、当たり前ではないことに気づくのだ」ということを、仕事をする中で目の当たりにすることができました。これからも、生徒指導だけでなく授業づくりにも力を入れていこうと思いました。

教員を目指される方へ

ここまで、ニュースレターを真剣に読んでくださった学生さんに、私から一言！「人生は、ドラマのようだ！」大学卒業してから現在に至るまで、正直、波乱に富んだ日々でした。その一つ一つがクライマックスか！と思うくらいです。守秘義務で、詳細は伏せますが、「辞めたい！」と感ずることはたくさんありました。しかし、ドラマのように人生は進んでいくので、困難に立ちをはだかったと思えば、子どもとの関わりに幸せを感じたり、授業づくりに没頭することに楽しさをおぼえたりすることもありました。特に子どもたちが批判的に物事を見つめ、自治能力をつけ始めたなど実感する時に、「いいぞ！子どもたち！」と、幸福を感じることが多いです。

最後に、皆さんの人生の目標は何ですか？もしWell-beingが人生の目標だとしたら、そのための手段としての仕事ですので、あまり気負いせずに、休む時はしっかりと休んでくださいね。そうドラマの間に入るCM放送だと思って、美味しいものを食べたり、人とお話したり、おでかけしたりして、しっかりと休んでくださいね。



教育実習体験報告

「成長を見守ることのすばらしさ」

国際福祉開発学部 国際福祉開発学科4年 星雅彦

私は知立市の中学校で教育実習を行いました。1年生を担当し、充実した3週間を過ごすことができました。教職課程を履修している学生にとって、教育実習は、まさに集大成とも言える貴重な実践の場です。座学での学びを超えるさまざまな経験ができましたが、特に「生徒の成長を見守る」ことに焦点を当てて述べます。

私が実習を行った学校では、実習期間中に前期中間テストと体育大会（緊急事態宣言を受けて延期）が計画されていました。そのため、それらの行事に向けて努力する生徒の姿を見ることができました。毎日生徒とやり取りをする連絡帳を通して、また、放課の時間に直接相談を受けることが何度もありました。1年生ということもあり、行事に対して期待に胸を躍らせながら、緊張や不安も抱えていたことでしょう。生徒たちがこれらの気持ちと向き合うことで変化し、成長していく様子を、間近で感じることができました。

体育大会の練習の時間に、トレーニングボール投げのグループに加わっていたときのことです。初めは山なりにボールを投げることすら難しかった生徒がいましたが、私や他の生徒のアドバイスを受けながら何度も投げ続け、徐々にできるようになっていきました。「うまく投げられるようになったよ！」と嬉しそうに話してくる生徒の様子を見て、私自身も嬉しくなり感動しました。そのとき、改めて、教師という仕事のよさを感じ、教師になりたいという思いが強まりました。

教育実習は3週間行われますが、どのような3週間になるかは、自分の意識によって変わります。何事にも積極的に関わる姿勢を持つことで、思いがけない学びを得ることができます。私自身、この実習で得た経験を大切に、今後も研鑽を積んで教職を目指す決意です。





教育実習体験記



経済学部 経済学科4年 柘植彩貴

実習初日に、校長先生と実習オリエンテーションを行い、実習に関わる注意事項や心構えを教えてくださいました。校長先生のお話の中に、「生徒がこの単元・授業を習えるのはこの瞬間だけ。その貴重な時間を良いものにするか、台無しにしてしまうかは教師側にかかっている。だから君たち実習生も教師という立場で生徒に接するからには、常に全力で取り組んでください」という言葉がありました。この言葉を聞いた瞬間に、生徒の時間を無駄にしないこと、そして自分自身の時間も無駄にしないように全力で頑張ろうと思いました。

私は、1年生の現代社会を担当しました。最初の2日間は、教科担当の先生の授業やほかの教科の授業を見学し、教師に慣れることで精一杯でした。私は実習3日目から授業を任せられ、1クラス週2回の授業を4クラス行いました。教科書を一言一句わからない単語・用語がないように調べ、その授業に関係する時事問題を新聞から引用するなど、自分なりにはかなり準備をして挑んだつもりでしたが、いざ教壇に立つと今まで準備してきたものがすべて真っ白な状態になり、思い通りの授業は出来ませんでした。いくら入念に準備をしても40人の生徒を目の前にすると今までに感じたことのない緊張感に押し潰されそうになりました。教科担当の先生の指導を受けるなかで、だんだんうまく授業ができていくことを実感しました。この感覚を忘れないうちに早く授業がしたいと思うようになりました。ひとりよがりの授業にならないように、生徒の発言をひとつひとつ大切にしながら授業を構築していくことが一番重要であると感じました。

私は、土日も含め毎日部活動に参加をしました。生徒とは違う教師の立場で部活動に参加して、一番感じたことは、「当たり前なんて一つもない」ということでした。毎日グラウンドに行けばサッカーができて、土日になれば試合ができる、そんな環境を高校時代は当たり前だと思っていました。しかし、先生は、何日も前から日程調整や場所の確保など常に動きます。生徒がグラウンドに来るより早く到着して一番最後まで残っている、ということを経験することで先生の苦労や大変さを肌で感じました。これは、部活だけでなく、授業や学校行事も同様です。決まった時間・場所に行けば先生がプリントを配って授業をしてくれる、行事が何事もなく進む、これは当たり前ではなく、先生が何十日もかけて事前準備をしてくれたからこそできていることです。

これから実習に行く学生は、実習に行けることに感謝をして、全力で取り組んでほしいと思います。授業だけを頑張るのではなく、大変ですが自分から率先して動き仕事をする、休み時間には生徒と積極的にコミュニケーションを取ってください。2週間・3週間という短い間ですがそこから学べることは、これからの自分の人生にとって貴重な財産になります。生徒・先生方の時間はもちろん自分の時間を無駄にしないためにも感謝の気持ちを忘れずに頑張ってください。



今後の予定

【3年生（1・2年生の参加も可）】

教員採用試験合格体験報告会

2021年12月18日（土）1・2限 対面開催予定

【1年生】

教職課程オリエンテーション

2022年3月25日（金）4・5限 美浜キャンパス・東海キャンパス

教職課程登録期間

2022年 3月下旬を予定

